

論説

芥川龍之介「南京の基督」にみる「怪奇」

—〈奇蹟〉と〈迷信〉をめぐる問題系—

陳 諭霖

1. はじめに

芥川龍之介の作品には、その初期から後期にいたるまで怪奇的な要素がちりばめられている。たとえば、「羅生門」（『帝国文学』1914.11）の死人の髪を抜く老婆、「妙な話」（『現代』1921.1）の出征中の夫の便りを知らせてくれた幽霊、「河童」（『改造』1927.3）の想像上の河童国に落ち込んだ話などである。これらの「怪奇」的要素について、従来の研究では、大きく三つの傾向が見られる。第一に、芥川自身の怪奇趣味及び大正期における心霊学の影響である。第二に、実母の発狂による芥川自身の心理的な「不安」の表れ（「狂気」に対する恐れ）である。第三に、作品中の怪奇的要素を、言論統制回避の手段とみる見方である。

だが、芥川龍之介の訪中（1921.3）前後に集中して書かれた小説を検証してみると、これらの作品には怪奇的要素が多く含まれていて、「戦争」と深く関わっていることが分かる。筆者がすでに別の論文等で指摘してきたように、これらの怪奇的要素は芥川自身の内的不安や批判の手法だけでは還元できない。それを裏付けるように戦争を背景にした一連の作品——「首が落ちた話」（1918）、「奇怪な再会」（1921）、「妙な話」（1921）、「金將軍」（1924）——に現れた死後蘇生、狂気、幽霊などといった怪奇的要素は、戦時下におかれた人々が共通に抱えている内面の問題を浮き彫りにしている。そして「南京の基督」（1920.7、「中央公論」）に出てくる「怪奇」もまた、そうした「戦争」（列強割拠）という背景と深く関わっている。というのも、宗教の「奇蹟」もまた、怪奇現象の一つに数えられるからである。

2. 「南京の基督」の先行研究

先行研究を検討する前に、簡単にあらすじを紹介しておきたい。

「南京の基督」は、近代南京を舞台にした、三つの章からなる短編小説である。一、二章では、「或秋の夜半」から翌朝までが描かれ、残りの三の章では、それから数ヶ月後の「翌年の春の或夜」に時間が設定されている。主人公である「色の青ざめた支那の少女」宋金花は、亡くなった母親の導きで改宗した基督信者であった。彼女は貧しい家計を助けるために「夜々その部屋に客を迎える、当年十五歳の私窩子」である。「私窩子」とは私娼のことで、作品に出てくる「姚家巷の警察署の御役人」の取締対象である。ある時から彼女は悪性の楊梅瘡を病み、朋輩は「誰かに移し返」せば治るという迷信じみた療法を教えるが、基督信者の彼女は、他人に迷惑をかけることを嫌い、客を断り続けた。なじみ客の足が遠ざかっていく中、ある夜西洋人か東洋人か見分けがつかない不思議な外国人客が訪れる。金花はこの外国人に「見覚えがあるような」「親しみ」を感じ、その親しみが「基督の顔」と生き写しであったためだと知った時、彼女はけなげな決心を忘れ、外国人と一夜を共にした。そしてその夜、金花はご馳走の夢を見た。その夢の中で外国人は基督だと自称し、金花にご馳走を食べると病気が治ると言った。翌朝、目覚めた金花は病気のことを思い出し、後悔するが、すでに男はいなかった。不思議な事に金花の病気は完治していた。翌年の春、一年ぶりに金花の所を訪れた日本人旅行家は、不思議な一夜のことと、病気治癒のことを聞き、その外国人が自分の知っている人で、彼がその後悪性の梅毒にかかり、発狂したという話を思い出し、それを金花相手に話し「蒙を啓いてやるべき」か、あるいは「昔の西洋の伝説のような夢をみさせて置くべき」かと迷うのである。

中国文学の教養の豊さと中国骨董書画の愛好で知られる芥川龍之介は、大阪毎日新聞社の海外特派員として大正十年（1921）三月、中国の土地を踏むのだが、この短編は派遣される一年前に書かれた作品である。つまり、芥川は現実の南京を見ないまま、この基督信者である中国売春少女の物語を書いたのである。しかも、その初刊本には「本編を草するに当り、谷崎潤一郎氏作「秦淮の一夜」に負ふ所尠からず。附記して感謝の意を表す」という意味深い一文が添えられており、谷崎潤一郎が南京に遊んだ私小説風紀行文「秦淮の夜」にヒントを得て書いたことが明らかにされている。

この附記について、これまでの多くの研究では、芥川が「秦淮の夜」から構想を得たのは、娼家の室内描写や中国地名などの舞台設定に止まるとされてきた。その一方で、この附記はなくてもさしつかえないものでありながら、敢えて載せることで、芥川は出典の隠蔽を試みたとみるのは、鷲只雄と西原大輔である。鷲はその理由を次のように述べている。

「秦淮の夜」という、いかにも関係が深そうに見える作品をことさらに指示して注意をそらし（同時に、読者がそれと対比してみることがあれば、換骨奪胎の手際の鮮やかさに舌をまくというシカケにもなっている）、本命は巧妙に隠蔽するという、これまでに何度も用いてきた芥川一流の陽動作戦なのではないか。（後略）

（前略）志賀直哉の「小僧の神様」がそれであったと私は思う。後述するように、「小僧の神様」との連想を容易にする「娼婦（金花）の神様（基督）」から、さらにヒネって「南京の基督」と命名することによって、読者の自然なアナロジイの通路を絶ち、さらに念を入れ、先手を打って〈附記〉を記すことによってダメオシとも言うべき本命隠蔽の仕上げがなされ、かくして作者の巧妙な韜晦は完成したと思われるのである²。

たしかに、「南京の基督」と「小僧の神様」という二つの作品には「附記」という共通項がある。しかし、それはあくまでも作品の技法であって、果たして典拠といえるのであろうか。また、両作品の性格も違っており、たとえ語り手の心中を明かされても、金花の「基督」は「迷信」とも「奇蹟」ともまだ詮索する余地があって、小僧の「神様」は最初から貴族議員Aと読者に知られている。「南京の基督」の「附記」に、谷崎作品との関係を明記されても、作品内容、作中人物に直接影響がなく、せいぜい読者に谷崎の「秦淮の夜」との比較の意欲を掻き立てるしかないのに対して、「小僧の神様」の「附記」は作品内容、作中人物に直接働きかけて、小僧の「神様」に「稲荷」という実体を与え、それまでAを小僧の「神様」と思い続けてきた読者の考えをひっくり返す作用がある。

一方、西原大輔も「南京の基督」の附記は典拠を隠蔽するために設けた仕掛けであることを指摘しながら、その典拠を「聖ジュリアン伝」として、その理由を下記のように説明する。

芥川龍之介は、谷崎潤一郎の「支那趣味」を非常に意識していた。

『支那遊記』では繰り返し谷崎に言及しており、谷崎の「支那趣味」が芥川に与えた影響の強さをうかがわせる。自分も中国を舞台にした異国趣味の作品を書いてみたいという強い思いを、「南京の基督」執筆当時の芥川が持っていたことは疑いない。しかし、「支那趣味」だけに頼っていたのでは、谷崎を越えることは難しい。芥川龍之介は、谷崎潤一郎ほど中国の風俗や物産に詳しくはなく、また実際に中国の土を踏んだこともなかった。そこで、フロベール作「聖ジュリアン」の技巧や段取りを用いることにより、谷崎とは異なる風格の「支那趣味」作品を作ることが可能だと考えたのではあるまいか。

この時芥川龍之介は、創作の鍵たる「聖ジュリアン」の存在については、なるべく隠蔽しておきたいという衝動に駆けられたにちがいない。

「西瓜の種」「翡翠の耳環」「紫檀の椅子」といった異国趣味的細部描写については、谷崎に依拠したことを率直に認めつつ、一方でフロベールの「聖ジュリアン」の手法についてはこれを隠し、まるで芥川自身の独創であるかのようにみせたかったのだ。³

西原の論説からすると、「南京の基督」はまったく独創性のない作品になり、その創作の構想も極めて安っぽいものに終わってしまう。谷崎から拝借したわずかな支那の語彙と聖人の伝記の手法を組み合わせて、自分の作品として発表するという剽窃行為を「附記」で隠蔽しようとする心理が芥川にあると西原はいう。だが、「附記」の機能は果たして隠蔽の手段だけであろうか。周知のように、古典からの翻案という手法はすでに「羅生門」（1915）、「芋粥」（1916）、「地獄変」（1918）に見られる。それは、現代の視点からももう一度古今に共通する人間性を見つめ直すもので、出典とされた『今昔物語集』、『宇治拾遺物語』にある猟奇的な事件記録を換骨奪胎させたもの

である。そうした翻案の手法を多用する芥川が、たとえ聖人伝の描写手法を借用したとしても、隠蔽する意味がどこにあるのであろうか。芥川は創作の手法に困っているのではなく、むしろつねに翻案を通して彼自身の問題意識を表現しているのだと見た方がよい。

わたしは彼是十年ばかり前に芸術的にキリスト教を——殊にカトリック教を愛していた。長崎の「日本の聖母の寺」は未だに私の記憶に残っている。こう云う私は北原白秋氏や木下杢太郎氏の播いた種をせせと拾っていた鴉に過ぎない。それから又何年か前にはキリスト教の為に殉じたキリスト教徒たちに或興味を感じていた。殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のように病的な興味を与えたのである。私はやっとこの頃になって四人の伝記作者の私たちに伝えたキリストと云う人を愛し出した。キリストは今日の私には行路の人のように見ることはできない。（「1 この人を見よ」『西方の人』、第15巻、p.246）

僕は年少の時 硝子画の窓や振り香炉やコンタスの為に基督教を愛した その後僕の心を捉えたものは聖人や福者の伝記だった 僕は彼等の捨命の事蹟に心理的或は戯曲的興味を感じ その為に又基督教を愛した 即ち僕は基督教を愛しながら 基督教信仰には徹頭徹尾冷淡だった しかし それはまだ好かった 僕は千九百二十二年来 基督教的信仰或は基督教徒を嘲る為に屢短篇やアフォリズムを艸した しかもそれ等の短篇はやはりいつも基督教の芸術的莊嚴を道具にしていた。 即ち僕は基督教を軽んずる為に反って基督教を愛したのだった 僕の罰を受けたのは必ずしもその為ばかりではあるまい けれども僕はその為にも罰を受けたことを信じている⁴（「一ある鞭」『ある鞭、その他』、第23巻、p.221）

以上二つの引用は芥川龍之介と基督教を論じる時によく参照される部分である。『西方の人』が発表される1925年からすれば、1920年に発表された「南京の基督」は、芥川が殉教者の事蹟や心理に興味を感じるころに当たる。

ならば、この短篇もやはり、殉教者の事蹟を「病的」、「戯曲的」と解釈し、基督教信仰や基督教徒を嘲るものと読めなくもない。だが、単純な西洋聖人伝の翻案ならまたしも、西洋の聖人伝で約束の奇蹟を中国に移植する意味はなんであろうか。これは当時中国における基督教伝道と合わせて考える必要がある。芥川が附記で谷崎の「秦淮の夜」に言及したのは、けっして隠蔽の手段として利用しているのではない。日本人旅行家の買春行為を通して、日中の力関係を読者に想起させ、イメージを膨らませるために意識的につけたのだと思われる。

附記の問題のほかに、従来の研究ではこの作品をめぐる「潜伏か完治か」と「キリスト教からのアプローチ」という二つの論点がある⁵。「潜伏か完治か」というのは、金花の病状の回復を「潜伏期」とするか、「完治」とするかをめぐる議論である。このうち「潜伏期」説は、「南京の基督」が発表された後、南部修太郎が「最近の創作を読む 六」（『東京日日新聞』1920. 7. 11）で「芥川氏は時々この作のような小綺麗に小器用に纏め挙げた Fiction を書いて、気持ち良さそうに遊んでいる」、「この種の作品から心にアピールする何物かを得ようなどとは私は思わない」と書いたことに対して、芥川が南部に書き送った書簡における「僕等作家が人生から Odious truth を掴んだ場合その暴露に躊躇する気持ちはあの日本の旅行家が悩んでいる心もちと同じではないか」、「金花の梅毒が治る事は今日の科学では可能だ唯根治ではない外面的徴候は第一期から第二期へ第二期から第三期へ進む間に消滅するつまり間歇的に平人同様となるのだ」といった箇所を論拠としている。簡単にいうと、「奇蹟」を「潜伏期」とするかどうかで、作品のテーマも迷信を暴くものか、迷信の幸せを説くものかのどちらかになるのである。いずれにしても、そこに現れているのは日本人旅行家の心に映る金花と「無頼な混血児」という「他者」像である。「治癒」という物理的な事実よりも筆者の関心はこうした日本人旅行家、または金花の語り映し出された「他者」像にある。この点についてはのちほど本論で触れる。

また、「キリスト教からのアプローチ」としては、「南京の基督」を基督教を嘲る作品⁶とする見方がある一方、「神聖な愚人」への限りない憧憬と、芥川自身の理知に対する反省⁷とみる説もある。

以上の二つのアプローチに加えて、近年よく見られるもうひとつのアプローチは、コロニアルな文脈に注目する読解である。たとえば、中村三春は「『南京の基督』研究史において、この混血や、ひいてはコロニアルな回路からの追求はほとんど見られない⁸」と述べている。また、西山康一も「その『混血児』に騙されたことを金花に教え、「昔の西洋の伝説のような夢」から目を覚まさせようとする日本の旅行家の態度に、当時の日本の中国大陸進出に対して最大の脅威となっていたアメリカなどへの対抗意識⁹」と日本と列強の中国における力関係を読みとっている。

さらに、近年では、地縁上の関係か、中国学者の読解が増えつつある。秦剛は「南京の基督」を「植民地主義的意識の正当性を問いかける物語機能を持つテキスト¹⁰」と指摘し、孔月¹¹もまた、時代情勢と関連づけて金花とカトリック教の結び付きを1910年代におけるアメリカの支那での医療伝道に見いだしている。こうしたコロニアリズム研究の文脈では、当時の日本におけるアメリカへの対抗意識が指摘されている。

本稿では、以上のような先行研究を踏まえて、金花の信仰と彼女の身に起った「奇蹟」、そしてそれを「迷信」として理解する日本人旅行客のあいだに見え隠れしている力関係を解明していきたい。

3. 売春する基督信者

ここでは、まず谷崎潤一郎の「秦淮の夜」と「南京の基督」との異同をはっきりさせ、芥川によって変更された部分から芥川の意図を考えたい。

「秦淮の夜」の内容は、谷崎と思われる「私」が南京の秦淮で芸妓を買おうとして、日本語のうまい中国人案内を雇って、車を走らせ、迷宮のような路地を彷徨い、暗闇の中で美女を探し続ける。そして、美しい芸妓を見出すのだが、値段が高いためやめて、最後は素人の売春婦、花月楼という17歳の少女に決めたという話である。

これまででは、芥川が「秦淮の夜」から構想を得たのは、中国の地名や娼婦の「閨房」の描写とされているが、それだけにとどまらない。他にも「秦淮の夜」のなかのいくつかの要素——「私のこの推量は全然間違っ居た。案内者の説明に依ると、娘は是非今夜泊まってくれるように哀願して居るのだ

そう」だと日本人旅行家と中国人娼婦が直接会話できないことから生じた誤解、およびその「日本人客と中国娼婦」という構図に重ねられている当時の日中関係や、さらに「談判をすれば大丈夫三弗までには負けるでしょう」と買春の金額を値切る場面など——が取り入れられている。

もちろん「南京の基督」には、芥川によっていくつかの重大な変更が加えられている。ひとつは視点の変更である。日本人旅行家の「私」という一人称の視点で書かれた「秦淮の夜」に対して、「南京の基督」では語り手が第三者の立場から中国人娼婦宋金花に寄り添う視点で語られ、最後の日本人旅行家の登場が金花中心の物語を覆す構造が取られている。また宗教と性病が重要なモチーフとして機能している。さらに外国人客をもう一人増やし、「不思議な外国人、金花、日本人旅行家」という三者の構図に変更している。では、こうした変更によって、中国人私娼金花、日本人旅行家、米日混血基督をめぐる「奇蹟」および「迷信」の問題、またそこに隠されている力関係とは、一体、どのようなものなのだろうか。

「南京の基督」の主人公宋金花は貧しい家計を助けるために「夜々その部屋に客を迎える、当年十五歳の私窩子」と設定されているが、以下の引用文にあるように、金花は「朋輩の売笑婦と違って」、「嘘もつかなければわがままも」いわず、親孝行な優しい子とされている。そうした金花の品行のよさは子供の時から母親に教えられた「羅馬カトリック教の信仰」のおかげだと語り手はいう。

（前略）彼女は朋輩の売笑婦と違って、嘘もつかなければわがままも張らず、夜毎に愉快そうな微笑を浮べて、この陰鬱な部屋を訪れる、さまざま客と戯れていた。そうして彼等の払って行く金が、稀に約束の額より多かった時は、たった一人の父親を、一杯でも余計好きな酒に飽かせてやる事を楽しみにしていた。

こう云う金花の行状は、勿論彼女が生れつきにも、拠っているのに違いなかった。しかしまだその外に何か理由があるとしたら、それは金花が子供の時から、壁の上の十字架が示す通り、なくなった母親に教えら

れた、羅馬カトリック教の信仰をずっと持ち続けているからであった。
(「南京の基督」、第6巻)

読者はここで、姦淫を禁ずる基督教道徳に照らしてみれば、基督教徒の金花が私娼であることに矛盾を感じるかもしれない。この点に注目しながら、金花と日本人旅行家との最初の対話を見てみよう。

——そう云えば今年の春、上海の競馬を見物かたがた、南部支那の風光を探りに来た、若い日本の旅行家が、金花の部屋に物好きな一夜を明かした事があった。その時彼は葉巻を啣えて、洋服の膝に軽々と小さな金花を抱いていたが、ふと壁の上の十字架を見ると、不審らしい顔をしながら、「お前は耶蘇教徒かい。」と、おぼつかない支那語で話しかけた。「ええ、五つの時に洗礼を受けました。」「そうしてこんな商売をしているのかい。」

彼の声にはこの瞬間、皮肉な調子が交ったようであった。が、金花は彼の腕に、鴉髻の頭を凭せながら、何時もの通り晴れ晴れと、糸切歯の見える笑を洩らした。

「この商売をしなければ、阿父様も私も餓え死をしてしまいますから。」

「お前の父親は老人なのかい。」

「ええ——もう腰も立たないのです。」

「しかしだね、——しかしこんな稼業をしていたのでは、天国に行かれないと思やしないか。」

「いいえ。」

金花はちょっと十字架を眺めながら、考深そうな眼つきになった。

「天国にいらっしゃる基督様は、きっと私の心もちを汲みとって下さると思いますから。——それでなければ基督様は姚家巷の警察署の御役人も同じ事ですもの。」

若い日本の旅行家は微笑した。そうして上衣の隠しを探ると、翡翠の耳環を一双出して、手ずから彼女の耳へ下げてやった。

「これはさっき日本へ土産に買った耳環だが、今夜の記念にお前にやるよ。」――

金花は始めて客をとった夜から、実際こう云う確信に自ら安んじていたのであった。（「南京の基督」、第6巻）

下線部にあるように、日本人旅行家は金花の職業と基督教道德の「矛盾」について、皮肉な調子で質問する。しかし、旅行家の予想を裏切るかのように、金花は堂々とした態度で、自分は親を養うために売春の道を選んだのであり、「基督様」はそうした自分を咎めるはずがないと説明する。

この点について、宮坂覚は「金花には一種のいなおりがあがるが、それを支えていたのは孝道であった¹²」と説明している。彼女が売春行為を「孝道」によって正当化しているという点は筆者も同意するが、それは「いなおり」ではない。彼女は最初から「売春」を罪と感じていなかったのである。それは先の引用の最後に見られる語り手のことばから確認できるだけでなく、彼女が楊梅瘡にかかったと知って基督に祈った次のような言葉、「私の商売は、私一人を汚す外には、誰にも迷惑はかけて居りません。ですから私はこの儘死んでも、必ず天国に行かれる」からも分かる。そう語る金花に対して、「不審→皮肉→微笑」という表情を示す日本人旅行家は、彼女の「矛盾」を嘲っているかのようである。

だが、ここでもう一度、金花が母親の教えで五つの時「カトリック教」の信者になったことを思い出してほしい。作品が発表された1920年から逆算して、彼女は1905年に洗礼を受けたことになる。王美秀『中國基督教史話』によると、19世紀末から基督教による教育、医療、文化伝道事業は飛躍的な成長を見せる¹³。だが、彼らの伝道は西欧の帝国主義と密接なつながりがあり、それゆえに中国の知識階級は反対したり、懐疑的な態度をとったりした。そのため、19世紀の中国人信者は主に乞食、浮浪者、孤児、未亡人など困窮した下層の民衆であった。彼らにとって、カトリックの信者になることは、何一つ失うものなしにご飯さえもらえることであり、それゆえに、食物のために信者になる人も少なくなかった。

もちろん金花は食物のために信仰をもったわけではない。しかし、金花の信仰もまた、自らの必要に根ざしたものであった。金花は、当時の中国社会状況に密着しながら自己の信ずるところを語っているのである。芥川が中国人娼婦金花を基督信者に設定したことから、西欧帝国主義の中国進出は信仰にまで浸透していたという現実を背景としているのである。

4. 「南京の基督」の発見と金花の夢

前述したように、本論は筆者の「怪奇」研究の一環である。では、「南京の基督」の「怪奇」とは何であろうか。それは「基督様の御顔」に似た「西洋人か東洋人か、奇体にその見分けがつかない「外国人」と一夜を共にした金花が、その夜不思議なご馳走の夢をみて、翌朝、彼女の梅毒が癒えていたことである。病気の治癒は金花に「外国人」を「基督」だと思い込ませる根拠になったのである。

この問題について、先行研究では、金花の夢に旅行家の内心の自白を対置しつつ、金花にとっての「奇蹟」を「迷信」と解釈するか、あるいは金花を「聖なる愚人」だと解釈するわけだが、それらは必ずしも十分な回答とはいえない。以下では、引用文を引きながら金花の夢をあらためて検討してみよう。

彼女の椅子の後には、絳紗の帷を垂れた窓があつて、その又窓の外には川があるのか、静な水の音や櫂の音が、絶えず此処まで聞えて来た。それがどうも彼女には、幼少の時から見慣れている、秦淮らしい心もちがした。しかし彼女が今いる所は、確に天国の町にある、基督の家に違ひなかつた。（後略）

その内に金花は誰か一人、音もなく彼女の椅子の後へ、歩み寄つたのに気づいた。そこで箸を持った儘、そつと後を振り返って見た。すると其処にはどう云う訳か、あると思つた窓がなくて、緞子の蒲団を敷いた紫檀の椅子に、見慣れない一人の外国人が、真鍮の水煙管を啣えながら、悠々と腰を下していた。

金花はその男を一目見ると、それが今夜彼女の部屋へ、泊りに来た男だと云う事がわかった。が、唯一つ彼と違う事には、丁度三日月のような光の環が、この外国人の頭の上、一尺ばかりの空に懸っていた。その時又金花の眼の前には、何だか湯気の立つ大皿が一つ、まるで卓から湧いたように、突然旨そうな料理を運んで来た。彼女はすぐに箸を挙げて、皿の中の珍味を挟まうとしたが、ふと彼女の後にいる外国人の事を思い出して、肩越しに彼を見返りながら、

「あなたも此処へいらっしやいませんか。」と、遠慮がましい声をかけた。

「まあ、お前だけお食べ。それを食べるとお前の病気が、今夜の内によくなくなるから。」

円光を頂いた外国人は、やはり水煙管を呷えた儘、無限の愛を含んだ微笑を洩らした。

「ではあなたは召上らないのでございますか。」

「私かい。私は支那料理は嫌いだよ。お前はまだ私を知らないのかい。耶蘇基督はまだ一度も、支那料理を食べた事はないのだよ。」

南京の基督はこう云ったと思うと、徐に紫檀の椅子を離れて、呆気にとられた金花の頬へ、後から優しい接吻を与えた。（「南京の基督」、第6巻）

金花は夢の中で自分の居場所を「幼少の時から見慣れている、秦淮」だと思っている。その次の語り手の言葉が「しかし彼女が今いる所は、確に天国の町にある、基督の家に違いなかった」とあるのは、やや唐突な印象を与える。もちろんその後、夢のなかで「円光を頂いた外国人」は「耶蘇基督」だと自称しているが、その時点では金花の視点からはまだそこを基督の家だと認知していないはずである。それゆえに、金花は「耶蘇基督」と自称する外国人の言葉を聞いて「呆気にとられた」のである。こうした「確に天国の町にある、基督の」という言葉は、語り手個人の言葉だと思われる。

こうした語り手個人の思い入れを排除すれば、金花の夢は彼女が秦淮のある豪邸で不思議なご馳走を食べている時に、一夜を共にした「外国人」が現

れて、支那料理が嫌いな「耶蘇基督」だと自称しながら、自分に料理を薦めて、それを食べると病気が治るといっただけの話になる。

つまり、金花の夢に反映されているのは、ご馳走や梅毒の治癒といった金花の切実な願望にすぎない。それを「天国の町」、「基督の家」、「南京の基督」と規定し、金花と一夜を共にした外国人——支那料理嫌いと自称する「円光を頂いた外国人」——と結びつけているのは、語り手なのである。実際、金花は夢から醒めた時点でもまだ「外国人」を基督とは信じていなかった。彼女は「もしあの人に病気でも移したら」と心苦しく思っていた。それが体にある楊梅瘡が一夜の内に跡形もなく消えたことを発見した時、初めて「ではあの人が基督様だったのだ」と信じるのである。

そのときまで、金花にとって、あの「外国人」は、「基督様の御顔」に似た、客の一人にすぎない。夢で基督だと自称する外国人客の言葉に驚く金花は夢の中の場所を「基督の家」と言うはずがない。つまり、「南京の基督」を見いだした、あるいは見いだしたかったのは、金花というよりは、まずは物語の語り手の方なのである。

5. 「無頼な混血児」と「南京の基督」は同一人物なのか？

この金花の身に起った奇蹟は、日本人旅行家の目には下の引用文のように違う物語になっている。彼の物語を「真実」とするならば、金花の「奇蹟」は「迷信」に追いやられる。いずれにせよ、そこには、語り手の目に映る金花と「外国人」という「他者」像が現れている。以下では、引用文に沿いながら旅行家の意識を検証していきたい。

「おれはその外国人を知っている。あいつは日本人と亜米利加人との混血児だ。名前は確か George Murry とか云ったっけ。あいつはおれの知り合いの路透電報局の通信員に、基督教を信じている、南京の私窩子を一晚買って、その女がすやすや眠っている間に、そっと逃げて来たと言
う話を得意らしく話したそうだ。おれがこの前に来た時には、丁度あいつもおれと同じ上海のホテルに泊っていたから、顔だけは今でも覚えてえる。何でもやはり英字新聞の通信員だと称していたが、男振りに似合

わな、人の悪そうな人間だった。あいつがその後悪性な梅毒から、とうとう発狂してしまったのは、事によるとこの女の病気が伝染したのかも知れない。しかしこの女は今になっても、ああ云う無頼な混血児を耶蘇基督だと思っている。おれは一体この女の為に、蒙を啓いてやるべきであろうか。それとも黙って永久に、昔の西洋の伝説のような夢を見せて置くべきだろうか……」

金花の話が終った時、彼は思い出したように隣寸を擦って、匂の高い葉巻をふかし出した。そうしてわざと熱心そうに、こんな窮した質問をした。

「そうかい。それは不思議だな。だが、——だがお前は、その後一度も煩わないかい。」

「ええ、一度も。」

金花は西瓜の種を噛りながら、暗れ晴れと顔を輝かせて、少しもためらわずに返事をした。（「南京の基督」、第6巻）

混血児、南京の私窩子、女が眠っている間に逃げたといった点は、確かに金花の不思議体験と一致している。しかし、日本人旅行家のいう「George Murry」が金花のいう「基督」と同一人物である根拠はどこにもないのだ。彼自身がいうように「事によるとこの女の病気が伝染したのかも知れない」と「George Murry」が悪性の梅毒で発狂したことも、それが金花のせいであるとはいえない。にもかかわらず、日本人旅行家は、金花の「奇蹟」を「蒙」（迷信）と決めつけるのである。ここで、人から聞いた二つの話を勝手に同じ出来事だと判定し、「無頼な混血児を耶蘇基督だと思っている」、あるいはそう思いたいのは、金花ではなく、日本人旅行家本人なのである。西山康¹⁴は、日本人旅行家のそうした啓蒙主義的な発想自体が、当時の欧米基督教を中心とした中国進出に対する日本の対抗意識と関係があると指摘している。筆者も同感である。つまり、日本人旅行家が早合点したのは、彼が金花の話から敏感に当時の欧米の基督布教の勢力を感じ取ったからなのである。そこには、南京の下層民衆である金花の心を宗教的に占有する西欧帝国植民主義に対する帝国日本の国民の対抗心も垣間見える。

そうした対抗意識のなかで、金花（中国人）の「蒙を啓いてやるべきであろうか」と考えることと、「無頼な混血児」にたいする敵意は、日本の中国進出と重なり合っている。金花が見た夢と体験の固有性はもはや重要ではない。「蒙昧な中国人」と「無頼な混血児」という筋書きはすでに日本人旅行家の心に出来ているからである。日本人旅行家の「他者」を語る姿勢は、結果的には、前述した「確に天国の町にある、基督の家に違いなかった」という語り手の態度とよく似ているのである。

6. おわりに

以上、作品内の語り注目しつつ、金花、日本人旅行家、「外国人」をめぐる「奇蹟」及び「迷信」の問題を見てきた。そこから見えてきたのは、物語の内部における、「金花 vs 物語の語り手」「無頼な混血児 vs 日本人旅行家」という他者と語り手の間のズレである。

語り手は、第三者の立場から金花に寄り添った視点で語るのではなく、せっかちにも金花の夢を「基督による奇蹟」に仕立てあげようとする。他方、日本人旅行家もまた、啓蒙的な態度で、金花の語る「基督」の背後に自分の知っている「現実」を対置してみせる。

この両者は、一見したところ正反対に見えるかもしれないが、金花を蒙昧な信者と見なす点と無頼な混血児を偽基督に仕立てようとする点において、図らずも一致している。そして、「奇蹟」を読み取る語り手と、「現実」を教え諭す日本人旅行客のあいだで、金花はただの無知で蒙昧な信者としての位置を与えられ、金花が見た夢と体験の固有性は否定されてしまうことになるのである。

そして語り手と「日本人旅行客」の双方が、金花の見た「夢と体験の固有性」を黙殺し、語り直してしまうことによって、テキスト内で金花（＝中国）及び金花の客の西洋人客は、言葉のない（言葉の通じない）「他者」として、表象されてしまっているのではないか。

つまり、宗教的な「奇蹟」が話題とされつつ、そこには当時の日本と中国の間の政治的な「現実」が取り込まれている、ということにこそ、注意が払われるべきではなからうか。

【付記】

引用するにあたり、すべての表記を新仮名遣いに改め、作品名及び巻数のみ記した。また芥川作品の引用は岩波書店『芥川龍之介全集』（1995-1998）による。

註

- ¹ 谷崎潤一郎作「秦淮の夜」の前半は、「秦淮の夜」として、1919年2月『中外』に、後半は1919年3月「南京奇望街」の題で『新小説』に発表された。のちに両者を合わせて「秦淮の夜」を表題とした。芥川の附記にある「秦淮の一夜」とは、誤記かもしれない。
- ² 鷲只雄「南京の基督」新攷『芥川龍之介作品論集 第3巻 西方の人—キリスト教・切支丹物の世界』、翰林書房、1999、p. 129。
- ³ 西原大輔「芥川龍之介「南京の基督」とフロベール」『広島大学日本語教育研究』第18号、広島大学大学院教育学研究科日本語教育講座、2008、p. 15。
- ⁴ 原文に従い、句読点はつけないままにした。
- ⁵ 細川正義「南京の基督」『芥川龍之介全作品事典』、勉誠出版、2000、pp. 402-404
- ⁶ 同注5、pp. 403-404。細川は以下のように述べる。
「笹淵友一は「芥川龍之介の基督教思想」（『解釈と鑑賞』1958.8）において、「南京の基督」を「明らかにキリスト教の信仰や信徒を嘲る意図をもった作品」「キリスト教の冒流を意図した」作品と批判的に述べている。駒尺喜美もこの作品を「肯定的キリシタンもので、「キリシタン物と、否定的キリシタン物」との「中間」に位置したもので、「キリシタンを殉教や信仰の美学からひき降ろしたもの」（『芥川龍之介作品研究』八木書店1969.5.20）と指摘している」
- ⁷ 河泰厚「南京の基督」「第四章 愚人への憧憬」『芥川龍之介の基督教思想』、翰林書房、1998、p. 174。「『南京の基督』の語るところは明らかである。それは一つは〈神聖な愚人〉への限りない憧憬と、もう一つはその世

界を裁断せんとする自身の理性の限界への自覚である。〈信〉と〈知〉のはざまに揺れる芥川の姿をここにもあざやかに読み取ることができる」

⁸ 中村三春「混血する表象——小説「南京の基督」と映画『南京の基督』」、『日本文学』第51号、2002、p. 17。

⁹ 西山康一「「幻想」／「迷信」としての〈中国〉——芥川龍之介「南京の基督」における〈科学〉と〈帝国主義〉」、『文学』第3巻・第3号、岩波書店、2002、pp. 204-205。

¹⁰ 秦剛「〈自己〉、そして〈他者〉表象としての「南京の基督」——同時代的コンテクストの中で」、『芥川龍之介研究』創刊号、国際芥川龍之介学会、2007、p. 11。

¹¹ 孔月「〈病〉と植民地の出会い——芥川龍之介「南京の基督」論」『文学研究論集』第26号、筑波大学比較・理論文学会、pp. 60-63。

¹² 宮坂覚「『南京の基督』論：金花の〈仮構の生〉に潜むもの」『文芸と思想』第40号、福岡女子大学文学部、1976、p. 42。

¹³ 王美秀「三、十九世紀基督教在中國の傳播」『中國基督教史話』、國家出版社、2004、pp. 160-161。

¹⁴ 注9と同じ。

(billion@nkfust.edu.tw)